



第110回

戦後80年と「戦争絵画」

※2025年8月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 2

東京国立近代美術館（東京都千代田区）は、先の大戦下の日本で戦争を題材として描かれ、終戦後に米軍に接収された絵画153点を所蔵している。戦意高揚などが目的とみなされた絵画群はいったん米国に輸送された。60年代に日米で返還交渉が行われ、米国政府が所有したまま日本に無期限で貸与する形で、70年に里帰りした。

近代美術館で開催中の企画展「コレクションを中心とした特集 記録をひらく 記憶をつむぐ」

はその絵画24点を含め、戦中戦後期の絵画やプロバガンダ用広告類を展示している。戦時中のポスターや、広島平和祈念資料館が所蔵する市民が描いた原爆の惨禍を伝える絵画など、内容は多岐に渡る。

陸軍の美術協会理事長を務めた洋画家、藤田嗣治が描いた「^{ハル}哈爾哈河畔之戦闘」は中国軍と衝突し、多くの死傷者を出した1939年のノモンハン事件が題材だ。戦闘はパノラマのように描かれている。一方、「アッツ島玉砕」からは戦争の悲惨さが伝わってくる。

「戦争絵画」の展示方法には返還時から議論がある。近代美術館はこうした点も考慮し、大規模展示よりも常設展で、時期を分けて数点を公開する方式を優先している。

芸術性とプロバガンダの両面を持つ作品群の評価は難しい。特別展は美術史の空白を埋める存在としてだけではなく、その背景も考えるよう工夫した構成に思われた。

米国から戻ってから既に半世紀
以上がたつ戦争絵画である。戦後
80年、無期限貸与という153点
の戦後は続いている。